

TSUTAYA 図書館は 図書館のバックボーンがない

海老名市立中央図書館見学記

明日の中之島図書館を考える会 代表世話人

稲垣 房子

いながき・ふさこ

1. 武雄市図書館に持ち込まれた都会型書店の経営手法

公共図書館の役割を長年考え続けてきた中で、2012年に佐賀県武雄市図書館の指定管理者が不透明な形でカルチュア・コンビニエンス・クラブ（以下CCC）に決定された経過には大きな疑問を持った。リニューアル開館後2013年8月に武雄市図書館を訪問し、その危惧は深まった。日本の近代化に大きな役割を果たした武雄市の歴史を否定する形で、都会型のおしゃれな書店経営の手法が持ち込まれた。旧蘭学館がきらびやかなDVD・CDのレンタルショップに改装されたのを見て、「地域の情報拠点」という公共図書館の根幹が根こそぎ切り倒されたような衝撃を受けた。開館当時は全国の自治体から視察団が押し寄せ、マスコミも連日好感度な報道をした。CCCは全国展開に弾みをつけた。

2013年は筆者の住む大阪府でも、公共図書館の運営が大きく問い直される時期であった。当時の橋下徹大阪市長からは大阪を集客力のある都市に作り替えようと「大阪府立中之島図書館を集客力の望める施設に転用してはどうか」という発言が飛び出した。そこには民間活力導入という道筋が示されている。「明日の中之島図書館を考える会」では、2013年11月総会に「武雄市図書館・歴史資料館を学習する市民の会」代表世話人井上一夫氏の講演を軸に、市民のための図書館の在り方、CCCの図書館経営手法について討議をした。筆者は書店としての蔦屋書店は嫌いではない。スターバックスもバリスタに顔を覚えてもらうほど通っている。代官山蔦屋書店も2015年に大阪梅田ルクア内に開店した蔦屋書店も、ユニークな品揃え

と見栄えのいい空間は人を引き付ける。図書館と書店は共存できる。しかし似て異なるもの、書店の経営と公共図書館の運営は基本的に異なることに、自治体行政を預かる人たちはなぜ気がつかないのだろう。

2. 武雄市図書館と同じ過ちを繰り返した海老名市立中央図書館

武雄市図書館と海老名市立中央図書館への評価はリニューアルオープン（2015年10月1日）前後から新聞、雑誌、WEB上等多くのメディアに登場し、田井郁久雄氏「虚像の民営化「ツタヤ図書館」」でも構造的な問題点が明らかになりつつある。塩見昇氏が図書館の指定管理者制度導入について重要な指摘をしている²⁾。筆者は図書館ヘビーユーズとして、ありのままを自分の目で評価したいと思ったが、結論は「公共図書館としては中核的な役割と機能が抜け落ちている」だ。

CCCに指定管理委託された2館目の海老名市立中央図書館を2015年11月9日訪問した。図書館なのに、本がさがせないラビリンス（迷宮）だ。小田急線・相模線・JR相模線「海老名駅」より徒歩7分。文化会館や福祉会館もある公共施設ゾーンの一角にある。駅前には再開発中でいいロケーションだ。じっくり資料群を見ながら、書店と図書館内を見て回った。

1階は“Library & Cafe”入口近くが一番いい場所に蔦屋書店があるのは武雄市図書館と同じだ。蔦屋書店には約600タイトルの雑誌と、見栄えのいいビジュアル図書『世界の美しい図書館』『世界の美しい書店』等が並んでいるのは本好きにはうれしい。関連グッズをセットにしているのも、蔦屋らしい販売戦略だ。雑誌架の裏側の部屋に「ビジネス・政治・国際・経済」のコーナーがある。狭い部屋だが販売用ビジネス書も少し並んでいる。図書館用ビジネス書の蔵書は貧弱だ。図書館の雑誌はどこにあるのか？ その部屋の壁面にパラパラと並んでいるのをやっと見つけた。利用者のご夫婦が職員に「図書館の雑誌はこれだけしかないのか？ 以前よりずいぶん減っている。雑誌は蔦屋で買えということか？」 CCC：「書店の雑誌は自由に読んでいただけますので、そこでお探しください」 利：「売り物を自由に読ませて、それを売るということか？ それっておかしいだろう」 CCC：「皆さまそうしておられます」 利：「この図書館の責任者はどこだ？」 CCC：「CCCと言います」 利：「それは委託業者だろう。役所の窓口はどこだ？」と怒りがおさまら

ない。筆者も『週刊東洋経済』が最新号しかないので「『週刊東洋経済』の10月31日号はどこにありますか?」と聞くと、「少々お待ちください」と、しばらく待たされた後「ここにはありません。予約してくだされば、他の図書館から取り寄せます」という返事。検索するとデータはあるのだが、基本的な雑誌のバックナンバーが揃っているのが図書館の基本だと考えるが、そういう発想はない。その後、図書館の雑誌タイトルを増やすと発表された。

2階は“Library”〈料理、暮らし、旅行、スポーツ、アート、人文〉1階から中央階段を昇ると2階の吹き抜けに大書架がそびえている。ヨーロッパの修道院図書館や旧王族・貴族の図書館は大書架が見られる。大英図書館の例を挙げるまでもなく、人類の叢智が詰まった書架であればその部屋に座る者に先人への感謝と文化への畏敬の念を生じさせる。この図書館の選書がお粗末なのは報じられている通りだし、ましてやフェイク本（家具店の勉強机に飾ってある本の形の偽物）が並んでいれば漫画にしかならない。

3. 図書館は市民の“知りたい”に答えているか?

3階は“Library & Studyspace”〈社会、教育、歴史・郷土、産業、語学・参考書といった専門図書と90席の学習室〉郷土・歴史室に新聞架がある。『神奈川新聞』10月24・25日に海老名市「つたや図書館を見る」上・下が掲載されているらしいが、大阪では入手しにくい。『神奈川新聞』の棚に1から8まで数字表示があるが、10がない? 3階のカウンターには誰もいない。2階まで行って、「『神奈川新聞』の10月分はどこにありますか?」と聞くと、3階の担当者を探してくれた。11月と10月は一番上段に入っていた。つまり最新を上置いてある。これでは職員は発行される度に重たい新聞を度々入れ替えなくてはならない。業務になれた図書館では近日号は分かりやすい場所に置き、12段あれば1月から12月まで見出しをつけ、一目で分かるようにしてある。せつかく12か月用に設計されているのに活かされていない。つまり職員が資料整理の基本が分かっていない。後日、自宅から『神奈川新聞』『朝日新聞』『日本経済新聞』等の所蔵検索をしたが確認できなかった。新聞のない図書館は考えられないので、データの取り方と検索システムが不安定で信頼できない。

4階は“Kids Library”プラネタリウムを改装した空間で、成人の空間とは動線も切り離されている。エレベーターを降りると目の前に蔦屋書店の児童書とおもちゃ売り場。自由に手にとれるので、付録が散乱していたり、ぞんざいな扱いになっている。お話しコーナーは円形の真ん中に靴を脱いで上がる。落ち着いてお話し会ができる状況ではないが、広報されているイベントは多い。

地下1階は“Library”国内・海外小説をメインに文学・文芸書。書庫を改装した落ち着ける空間だ。

4. 利用者が育てる図書館、利用者を育てる図書館であるか?

レファレンスブックは3階参考書のコーナーに書架の埋め合わせのように、適当（信じられないけど、本当）に置かれているので、これでは図書館員にレファレンスを求めるのはとても、無理。はじめからレファレンスという機能を捨てていると思える。職員は苦情処理に追われているので問い詰めるのも、気の毒になってしまった。市民の調査能力さえ否定しているように思ってしまう。図書館員は利用者との対話の中で専門職としての技量を磨いていくが、ここでは会話の成りたちにくい構造になっている。

資料を探すには使いにくいiPadで、検索するしかない。初期画面では“本を借りる、本を買う”が同時に表示される。いくつかのテーマで検索してみて、地下から4階までの所在が表示されるが、本当に予想外の配置になっている。“ライフスタイル分類”とその配置は全く理解できない。著者名を示すカタカナ表記も配架上は活かされていない。館内で10数名の自治体市議視察団らしい一行を案内していたCCCの職員は「ふつうの図書館とは違って、独自の配架をしています。ライフスタイル・生活感覚に沿って、料理も菓子も関連付けて資料に導かれます。」と説明していた。資料を売って完結の書店ならこれでいい。しかし整理・分類して、長期に保存し、提供するという図書館の基本が全く抜けている。要するに資料の体系的配置を否定し“本との出会い”を大切にしているので、31万冊蔵書を管理する図書館としては機能していない。高書架のフェイク本も含めて、図書の世界に囲まれているという心地よさは演出されている。階段を登り降りする迷路のような書架配置は“楽しい出会い”になるのか。子どもに言わせると「かくれんぼのできる図

書館」なのである。撮影は禁止だが、スマホで撮っている人は多い。写真写りはよく、スタバ席はいい感じで、適当に選んだ本をそばに積んで読書、自習、昼寝にはいい場所だ。私も PC を持ち込んで、書きかけのレポートをスタバで仕上げた。スタバ席にはコンセントはあるが、図書館の閲覧席ではなぜか利用者用コンセントをみつけれなかった。見学者を案内していた CCC 職員は「この書架や机・椅子は特注です。いごちのいい図書館を作りました」と誇らしげに言っていたので、総事業費 10 億円以上の税金をつぎ込んだ効果はあったということだ。

5. 地味なサービスの積み重ねが図書館サービスを向上させる

海老名市立図書館が公共図書館としての役割を放棄したのではないか、という失望感をいだきながら、その足で藤沢市立総合市民図書館を訪問した。開館の 1986 年に見学したのを思い出した。「これがまっとうな公共図書館だ」とほっとした。まず、豊富な雑誌のタイトルとバックナンバーの充実。はやりのグラビア雑誌ではなく、今の日本・世界を読み解くための雑誌、自立した市民がじっくり思考するための図書がそろっている。

カウンターで『「図書新聞」2015年7月4日号ありますか?』尋ねるとすぐ持ってきてくれた。この当たり前のサービスをありがたく感じる。海老名市立有馬図書館長・TRC 谷一文子氏の「すべての問題の根本は資料費の削減にある」というインタビュー記事をコピーした。一般資料室も蔵書は豊富だが、特に調査研究室の地域資料、レファレンスブックは充実している。カウンターにはもちろん司書がいるので、この部屋ならじっくり調べ物ができる。ところで、藤沢市立図書館の現状を確認すると、藤沢市は、2012年4月より辻堂市民図書館と湘南大庭市民図書館が「NPO 法人市民の図書館・ふじさわ」に業務委託³⁾されている。総合市民図書館で私が対応してもらったカウンターの人も正規職員でない可能性もある。他の図書館でもよくあることだが、不安定な労働条件に置かれている人たちが図書館サービスの大きな部分を担っているのであれば、日本の図書館は人材の面からも大きな危機を抱えていると言わざるを得ない。もうひとつ気になる点はひとつだけ注文をつけると、公の施設は自治体を作った以上、責任を持って、適正な施設管理をしていかなければならない。岡田進一設計事務所設計の藤沢市立総合市民図書館は約 30 年

近い年月を経ている。藤沢市立図書館もこれだけの資料を持ち、市民サービスを提供しているので、施設のメンテナンスに努力してほしい。

6. 神奈川県内図書館のネットワークはどこに

2013年に大阪府立中之島図書館の危機があった同時期に神奈川県立図書館にもっと深刻な状況が訪れた。『図書館雑誌』『みんなの図書館』でもたびたび報告されている。東京都立図書館、大阪府立図書館と神奈川県立図書館は長年それぞれ都市型都道府県立図書館としての役割を果たすべく歴史をきざんできた。神奈川県の問題は大阪の問題でもあると認識している。神奈川県立図書館問題に関しては 2012 年時点から市民レベルでの論議の場が継続的に、また多様な方面から取り組まれている。県内自治体の図書館が市民要求に誠実にこたえ、サービスを充実させようと日々努力をする中で、県立図書館の重要性が浮かび上がってくるはずだ。県立図書館の存在を支えるのはもちろん県民だが、県内の自治体図書館でもある。図書館サービスは設置母体や館種を越え、ネットワークを形成し、資源共有を図り、市民に情報を提供するのが最大の課題だ。競争原理で動く営利企業の経営手法とは相入れないものだ。民間に委託された図書館が県内に増えることは人のつながりもネットワークの形成にもほころびが生じる。神奈川県は県内の館種を越えたネットワークが財産であったはずだ。

にぎわいを作りたいと思うなら、公共図書館を元気にするのが早道だ。行政を預かる人は地域の書店も元気になる、地域の人がまともな給料で働ける場を確保し、継続的に責任を持った図書館運営ができるよう努力をして欲しい。その自治体に信頼される資料と図書館員がいることが住民を育て、まちづくりを進めることができる。

- 1) 田井郁久雄氏「虚像の民営化「ツタヤ図書館」」『世界』2015年12月号
- 2) 塩見昇「“問題提起”「ツタヤ図書館」問題を通して図書館の指定管理者制度を考える」『出版ニュース』2015.11下
- 3) 藤沢市立図書館 https://www.lib.city.fujisawa.kanagawa.jp/aboutlib_repo.html (2015年12月18日確認)
- 4) 特集・がんばれ! 都道府県立図書館『図書館雑誌』2014年6月号
- 5) 緊急特集 神奈川県立・大阪府立図書館はどうなる? どうする? どうしたい? 『みんなの図書館』2012年10月号